

鳥羽市立「海の博物館」を訪ねて

池田 隆

息子の招待で伊勢志摩観光へ出掛け、パールライン沿いの鳥羽市立「海の博物館」に立ち寄った。展示物への興味もさること乍、大学の尊敬する大先輩、内藤廣の建築設計を私にも見せたかったようである。

遠くからの外観は私が今まで見てきた博物館や美術館のイメージとはまったく異なる。古典的な豪華華美さはなく、現代的なシンプルなスマートさもない。漁村などでよく見かける焼き杉板の黒壁、瓦葺の大きな倉庫風の建物が何棟か無造作に散在している。この周囲環境に馴染んだ親しみ易さや低建造費に加えて独創的な建築構造が高く評価され、1992年度の建築学会賞に輝いたとのこと。

二十数年前に息子の設計で蓼科に山荘を建てた際、彼が焼き杉板の外壁に拘っていた理由が今にして分かった。結局材料入手が簡単にできず採用を諦めたが。

閑話休題、博物館には二棟の展示棟と三棟の収蔵庫、一棟の体験学習棟があり、二棟の収蔵庫を除き一般見学が出来る。室内に入ると、内部に壁や柱がなく、縦に並んだ集成木材の大きなアーチ列が目に残る。屋根や外壁を支えるこのアーチ形式は構造機能と視覚美を兼ね備えた「工芸」の神髄といえよう。それを自然光で浮かび上げらせる棟木沿いの大きな天窓も心憎い。

海洋民の民俗や漁労技術に関する様々な展示資料については、丹念に見学する時間がなく心残りであった。ただ現在も鳥羽には千名ほどの現役の海女さんがいると知り、ホテルで昨晚食べた伊勢エビも彼女らが取ったのかなと想像し、急に親近感を覚える。使用済みの木造漁船を保管している収蔵庫も印象に残る。古代の丸木船から比較的最近まで使われていたエンジン付きの小型漁船まで、数十艘が並べてある。その一艘の漁船には寄贈者のコメントとして、「この愛船で一生懸命に働き二人の娘を嫁がせました。しかし私も高齢になったので三人目の娘を嫁に出す気持ちで手放します」の記載がある。漁師の心意気まで伝わってきた。